

聖霊降臨日（6月4日の福音朗読）

ヨハネの福音 20章 19 - 23節

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

逐語的な訳と構成

19 さて夕方になって 週の初めのその日、

そして いくつもの戸が 閉じられていて、

そこには いた 弟子たちが ユダヤ人への恐れのために、

来た イエスが、

そして 彼は立った まん中に。

A

そして 彼は言う 彼らに、

「平和が あなたがたに」。

そして これを 言つて、

彼は示した 両手とわき腹を 彼らに。

B

そこで 喜んだ 弟子たちは 見て 主を。

C

21 そこで 言った 彼らに 「イエスは」 再び、

「平和が あなたがたに。

ように 遣わした 私を 父が、

私も 送る あなたがたを」。

D

22 そして これを 言つて、 彼は息を吹きかけた。

そして 彼は言う 彼らに、

「受けなさい 聖霊を。」

23 ある人たちの あなたがたが赦せば 罪を、

それらは赦される 彼らに関して。

ある人たちの あなたがたが保持すれば、

それらは保持されている。

E

①構成の解説。今週の福音は五つの小段落から構成されている。最初の段落Aではイエスの到来が語られるが、最初の四行がひとつの文章を作り、五行目が二番目の文章を作っており、どちらも主語はイエスである。最初の文章の主動詞は「来た」であり、一行目〜三行目は「イエスが来た」ときの日時や状況を述べている。一行目の「さて夕方になって、週の初めのその日」は日時を述べ、二行目の「いくつもの戸が閉じられて」は家の状態を述べ、三行目の「そこには弟子たちがユダヤ人への恐れのために」と述べて、弟子たちの様子を描き出している（冒頭の「そこには」は関係副詞）。「日付 ↓ 家の状態 ↓ 弟子たちの恐れ」と筆を進め、四行目で主動詞「来た」を主語「イエス」の前に置いている。このような記述は、明らかに「イエスが来た」という事実を強調し、そこに読者の注意を集中させるためである。そのイエスが、弟子たちの真ん中に立ったのである（五行目）。

続く段落Bでは、イエスの言葉と動作が描かれる。「平和があなたがたに」という挨拶はユダヤ人の間では、「今日は」とか「さようなら」と同じように、ごく普通の挨拶として用いられるのは確かだが、後で述べるように、イエスのこの言葉は日常の挨拶を越えた意味を持っていると思われる。イエスはこの言葉を述べてから、「両手とわき腹」を弟子たちに示す。そこには釘跡と刺傷があるはずである。それらの傷は、弟子たちの真ん中に立つ方が幽霊でも幻想でもなく、十字架に上られた「あの方」であることを示している。

段落Cでは、それを見た弟子たちの反応が書かれる。共観福音書では、よみがえったイエスに出会った弟子は、喜ぶよりも前に、驚いたり、疑ったりするが、ヨハネ福音書では単純に「喜んだ」とあるだけである。この喜びが使命を積極的に受け入れさせる力を与えることになる。

段落Dでは、段落Bと同様に、イエスの言葉と動作が描かれる。イエスは再び「平和があなたがたに」と繰り返す。これが単純な挨拶であれば、二度も繰り返しはしないであろう。イエスの挨拶は儀礼で終わらずに、実質的な意味を持っている。告別説教でのイエスの約束(ヨハ十四27)の成就としての「平和」を指しているだろう。弟子たちを神からの平和で満たした後、イエスは彼らに使命を与える。その使命はイエス自身が神から託された使命であり、弟子たちはその使命を受け継ぐものとなる(ヨハ十七18)。イエスは神の愛を世に示すために遣わされたが、その同じ使命に弟子たちも加わることになる。それを語り終えると、彼らに息を吹きかける。彼らが使命を担い、それを遂行することができるようにと、彼らを新たに、変えるためである。

最後の段落Eでは、イエスの吹きかけた息が聖霊であり、それによって弟子に与えられた権能が述べられる。23節1行目の「ある人たちの」は、動詞を飛び越して、行末の「罪を」にかかっている。どんな人の罪であれ、弟子たちが赦すなら、その罪は不問に付される。しかし、赦さずに憎しみを保ち続けるなら、それはそのまま残ってしまう。弟子たちは罪を赦せるようにと霊を受けた。その力を用いずに、憎しみをそのまま残すのは愚かなことに違いない。23節後半のイエスの言葉は、罪を赦すようにとの勧めである。今週の福音の構成に注目すると、イエスの言葉と動作を述べる段落Bと段落Dが対応しているのは明らかである。ユダヤ人たちが恐れていた弟子たちは(段落A)、イエスの言葉と動作によって(段落B)恐れから解放され、喜びに満たされる(段落C)。喜びに包まれた弟子たちに、再びイエスは語りかけ、息を吹きかける(段落D)。喜びと平和を受けた者に、さらに霊が与えられ、赦すことのできる者に変えられてゆく。

② 語句の解説。

19節「夕方になって」。ヨハネ8章は、「週の初めの日(日曜日)」に起こった復活の出来事を述べている。

① 朝早く、まだ暗いうち。

ペトロと愛弟子が墓が空であることを確認(1-10節)

② ペトロと愛弟子が家に帰った後。

マグダラのマリアにイエスが顕現(11-18節)

③ その日の夕方。

イエスが弟子たちに顕現(19-23節)

④ 八日後(の日曜日)。

トマスに顕現(24-29節)

今週の福音は、イエスが復活した日曜日の「夕方」の出来事である。▼「いくつもの戸が閉じられて」。弟子はユダヤ人を恐れて家の中にいたと述べられている。いくつもの戸を閉じていたのは、その恐れのためだったであろう。しかし、イエスは戸に鍵がかけられていても、家の中に入り、弟子たちの真ん中に立つ。八日後、トマスにイエスが顕現する時も、「戸が閉じられて」いるが、そこには戸を閉じていた理由は何も述べられていない。戸が閉じられていたと述べるのは、イエスが肉体の命を取り戻したのではなく、復活の命へとよみがえったことを知らせるためかも知れない。▼「平和があなたがたに」。ユダヤ人の間では、「シャローム(平和)」はごく普通の挨拶である。イエスは家の中に閉じこもる弟子たちの真ん中に立ち、「平和があなたがたに」と語り掛ける。イエスは2節でも「平和があなたがたに」と繰り返している。イエスは単なる挨拶としてではなく、それ以上の意味を込めて、弟子に「平和が」と述べたのであろう。

イエスは「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」(二四27)と約束した。イエスが約束していた「平和」が今、現実のものとして弟子たちに与えられたことを、この挨拶は示している。

20節「両手とわき腹」。イエスの両手には、十字架に釘づけにされたときの傷跡があり、イエスが息を引き取った後、兵士はイエスのわき腹を刺した傷もある(ヨハ一九34)。イエスは両手とわき腹を弟子に見せる。これは十字架に死んだイエスと復活のイエスが同一人物であることを示し、弟子が見ている光景が幻ではないことを告げている。

22節「息を吹きかけた」。この動詞(エンピユサオ)は新約聖書ではここにしか用いられていない。神が「土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」(創二7)ように、イエスは弟子に息を吹きかけ、復活の命に生きる者へと創造しなおす。神の息は物事を新たにし、人をまったく新たな存在に変えてしまう。▼「聖霊を受けなさい」。「霊」という語は、もともとは「空気の移動・息」を意味する。イエスが息を吹きかけられた弟子たちは、「霊」を受けたのである。それは果たすべき使命が与えられたしるしであり、その使命を完遂する力が与えられていることを示している。

23節「赦す・保持する」。「赦す」と訳した語は、「借金を」免ずる・放っておく・そのままにする」という意味を持つている(ちなみに、パウロが好んで使う「赦す(カリソマイ)」は「恵み(カリス)」からの派生語である)。「保持する」はここでは、「罪を捕まえておく」ことであり、「赦さない」の意味になる。

③「今日の福音」からのメッセージ

復活したイエスがマグダラのマリアに現れたその日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、「戸」を閉ざしている。ここでの「戸」は複数形で書かれているから、いくつもの戸が閉じられていたことになる。この戸は家の戸であると同時に、彼らの心の「戸」をも意味しているかもしれない。恐れが彼らの心を閉ざしていたが、その彼らのただ中に「来た」イエスは「平和があなたがたに」と挨拶する。これは「今日は」とか、「さようなら」という意味で、ごく日常的な挨拶の言葉にもなる。さらにイエスは両手とわき腹を示し、もう一度「平和があなたがたに」と述べて、彼らに息を吹きかける。しかし、挨拶と行動のこの繰り返しは、単純な反復でない。

一度目の挨拶の後、弟子は恐れから解放され、喜びに満たされている(20b節)。この喜ぶ弟子たちに息が吹きかけられて、権能が付与されてゆくのであるから、二度目の「平和があなたがたに」は使命と権能が授けられるための挨拶であろう。これは14章の告別説教でイエスが約束していた「平和」(二四27)の成就と考えられる。イエスの挨拶はエチケットの領域に留まらずに、恐れを喜びに変える「平和」をもたらし。

こうして、喜びに浸る弟子たちにイエスは使命を与える。父に派遣されたイエスは、弟子たちをもこの派遣に参加させる。イエスが吹きかけた息は弟子たちを造り変える「命の息」(創二7)であり、すべての人をその汚れから清める霊の息吹でもある(エゼ三六25-27)。イエスとの交わりは、イエスの死によって断たれることなく、復活によってさらに高められてゆく。

週の初めの日によみがえり、マグダラのマリアに現れたイエスは、19節以後、二度にわたって弟子たちに現れているが、そのいずれもが週の初めの日(つまり日曜日)の出来事である。週の初めの日にはキリスト者が集まり、祭儀を行う日でもあった。祭儀が行われるときにはいつも、イエスはその真ん中に立ち、「平和があなたがたに」と述べて、使命と権能を与え、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と呼びかけている。十字架によつて我々の罪を贖ったイエスは、復活によつて死に打ち勝ち、死をも越えた「平和」を我々にもたらす。この「平和の主」と共に生きる者は、トマスがそうしたように、「私の主、私の神」と告白することになる。この告白は神の息が吹き込まれ、新たな使命を与えられた者が喜びのうちに言う告白である。その使命には、罪を赦すことも含まれている。私たちが赦さなければ、罪はそのまま残ってしまう。

④「平和(エイレーネー)」の意味

新約聖書には92回の用例があり、1ヨハを除くすべての文書で使われている。用例の多くは、福音書(ルカ14、ヨハ6、マタ4、マコ1)・使徒言行録(7)・パウロ書簡(ロマ10、エフェ8など)である。ほとんどの用例でこの語は「平和」と訳されるが、平和をとらえる観点や文脈の違いによつて、意味合いや用

法は異なってくる。

①まず、ギリシャ語としては「戦争や争いのない状態」を意味する。②文字通りの用法。戦況の不利を悟った王は、敵が遠方にいる間に使節を送り、「平和」を求める(ルカ一四32)。強い人が武装する屋敷の持ち物は「安全」である(ルカ一21)。「平和を奪い取る」という表現は、戦争状態への突入を意味する(黙六4)。③転義して、「一致・調和」としての平和を意味する。イエスが地上にもたらすのは剣や分裂であり、「平和」ではない(マタ十34と並行箇所)。モーセは争う人々を「平和」のために和解させる(使七26)。メルキゼデクの名前の意味は「平和の王」である(ヘブ七2)。義の実は「平和」を実現する人々によって蒔かれる(ヤコ三18)。神の前に立つ働き手は「平和」を追求しなければならない(2テモ二22)。キリスト者にふさわしい生活は、すべての人との「平和」や「平和」に関する事柄を追求することである(ヘブ一二14、ローマ一四19)。④「秩序ある状態」としての平和。この意味では、無秩序の反意語として使われる(1コリ一四33)。

②次に、ヘブライ語シャロームの意味に応じて、「安心・無事・平安」を意味する。「平和のうちに行きなさい」は別れの挨拶である(ヤコ二16、使一六36)。同様の表現は、イエスがよみがえらせた会堂長の娘や(マコ五34)、罪を赦した女への帰還命令に使われる(ルカ七50)。パウロはコリントの人々にテモテを「安全に」送り出すように依頼する(1コリ一六11)。ユダとシラスはアンテイオキアを「平和と共に」去るが、これは送別の挨拶を受けることを指している(使一五33)。

「あなたがたに平和」は、ユダヤ人にとっては挨拶の文句である。これはごく日常的な挨拶であるが、新約聖書では儀礼的な挨拶を超え、神からの祝福を伝える手立てとなっている。だから、イエスに派遣された七十二人は、どこかの家に入ったら、まず「この家に平和」と言うように命じられている(ルカ十5)。また、ヘブ・ヤコ・1ヨハ・3ヨハの四つを除くすべての書簡で、「平和」は手紙の書き出しの挨拶になる。最も多い表現は「恵みと平和」であり(ローマ一7など12例)、「恵みと憐れみと平和」や(1テモ一2など3例)、「恵み(ないしは憐れみ)と平和が豊かに与えられるように」と記される用例もある(1ペト一2など3例)。手紙の挨拶では、「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの平和」と述べており、この平和は神から来る賜物であり、イエス・キリストを通して人に与えられる。

③その場合、平和は単なる無事や平安ではなく、神がもたらす救いと同義であり、イエス・キリストを通して神から人に与えられる恵みの賜物を意味する。このような平和のとらえ方は、特にパウロに顕著である。

パウロにとって、神は「平和の神」である(ローマ一五33など)。また、この語は「恵み」や「憐れみ」(ガラ六16)、「栄光・誉れ」(ローマ二10)、「命」(八6)、「愛」(2コリ一三11)と共に使われることから分かるように、平和は神からの救いの賜物である。平和を造り出すのは神だから、パウロは平和を神に祈り求める(ローマ一五13)。

神からの「平和」はイエス・キリストを通して与えられる(ロマ五1)。不信心な罪人として神の敵であった人間のために死んだキリストによって、人間は神の怒りから救われ、神との和解を得ているからである(五6―11)。その意味で、キリストは「わたしたちの平和」である(エフェ二14)。キリストにおいて神がもたらす平和は、神との平和を生むだけでなく、ユダヤ人と異邦人の隔ての壁を取り壊し(二14)、教会を一つの体に造り上げる(コロ三15)。キリストは神がもたらす平和の根拠であり、キリストを宣べ伝える福音は「平和の福音」と呼ばれる(エフェ六15)。パウロの働きは、キリストの使者となって神からゆだねられた和解の言葉を宣教することである(2コリ五20)。

今日の福音では、復活したイエスが「あなたがたに平和」と弟子たちに呼びかける(19・21・26節)。これは、日常的な挨拶よりは、イエスと弟子たちの関わりの深さを表している。ヨハネ福音書の平和は、イエスが弟子たちに約束していた平和である(一四27、一六33)。イエスが与えるこの平和のなかで、弟子たちはイエスと共に生きる。この平和に招き込まれた者は復活のいのちに生き始めている。